

図書館だより

萬葉集へ繋がる想いを言の葉にのせて

令和元年(二〇一九)九月一日・第九六号

成田高等学校図書館委員会発行

梅花歌三十二首 并序

天平二年正月十三日 萃于師老之宅申宴會

也于時初春令月氣淑風和梅披鏡前之粉蘭

蕙珮後之香加以曙嶺移雲松掛羅勿傾蓋夕

萬葉集 宝永六版(一七〇九年)

(成田山仏教図書館所蔵)

令和典拠の万葉集について

国語科主任教諭 伊藤俊雄

二〇一九年は、元号の典拠として初めて国書「万葉集」が使用された。四月二日の朝日新聞によると、万葉集における令和の説明として、七三〇(天平二)年正月に太宰帥を務める大伴旅人の邸宅で宴会があり、「落ちる梅」をテーマ

に読まれた三十二の歌の序文にある「初春の令月(れいげつ)」「風和らく(やわらく)」「が新元号の典拠であったとある。この序文が東晋王羲之の「蘭亭序」に出る「惠風和暢(けいふうわちよう)」と重なる。さらに梅は中国の国花の一つで中国原産とされている。以下に万葉集について述べていきたい。

万葉集は、奈良時代までの歌の集大成で、二十巻・約四千五百首から成る。素朴で大らかな「ますらをぶり」の歌風が特徴である。「書名は、多くの歌の意味するが、「葉」は「世」代」の意で、万世にわたり長く語り続けんとする祝福の気持ちも込められているとされる。これを最終的にまとめた編纂者としては、平安朝で有力だった橘諸兄(たちばなのもろえ)説、契沖が唱えた大伴家持説などがあるが、家持が編纂に関わったのは、動かすことのできない事実である。

成立は七五九(天平宝字三)年以後に二十巻となり、宝龜年間(七七〇―七八〇)に現行本が完成したとする説が有力である。

作者は天皇から庶民まで、時代の幅も、十六代仁徳帝から四十七代淳仁帝までの数百年、地域も陸奥国から筑紫国に及ぶ。

『万葉集』は「古歌集」「柿本人麻呂歌集」「類聚歌林(るいじゅうかりん)」「高橋虫麻呂歌集」などの先行歌集を参考にして成立した古代の歌集で、生活に密着したものが多く、背景となる激動の時代の中で、反逆者の名の下に殺された皇子を思う姉・大伯皇女(おおこのひめみこ)の慟哭、

わが背子を大和へ遣るとさ夜更けて暁露にわが立ちぬれし(巻二・一〇五)
防人の夫を案じる妻の直情、
防人に行くは誰が背と問う人を見るが羨しさ
物思もせず(巻二・四四二五)
東国の民謡に見られるのどかさ、
多摩川に曝す手作さらさら何そこの児のこ
こだ愛しき(巻一四・三三三三)
など、感情を率直に歌い上げる伸びやかな「ますらをぶり」が基調となっている。

相聞の恋歌、
あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや
君が袖振る(巻一・二二〇)
死者を悼んだり、哀傷を歌い上げた挽歌、
海人娘子玉求むらし沖つ波かしこき海に舟出
せり見ゆ(巻六・一〇〇三)
先の二つに属さない雑歌、
松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる子らが家
路知らずも(巻五・八五六)

の三つの部立を基本とする。さらに、寄物陳思(ものよせておもひをのぶる)、いつくにか舟泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし柵なし小舟(巻一・五八)

正述心緒(ただにおもひをのぶる)、大君の任けのまにまにますらをの心振り越こし(巻一七・三九六二)
羈旅(きりよ)歌、
旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ舟沖を漕ぐ見ゆ(巻三・二七〇)
有由縁(ゆゑんある)歌、
筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき児ろが布乾さるかも(巻一四・三三二一)
或いは歌体により、長歌、
天地の分かれし時ゆゆ神さびて高く貴き駿河なる(巻三・三二七)
旋頭歌、
佐保川の岸のつかさの柴な刈りそねありつとも
春し来たらば立ち隠るがね(巻四・五二九)
など表現態度によつて分類された巻もある。

史的評価として、文学意識を持った初の記載文学として文学史上の高い位置を占める。創作文芸中、最も早く完成した和歌の揺籃期から爛熟期までを含み、また、集団の文芸から個の文芸へと移り変わる過程が示されている。令和とは、私たちが見直さなければならぬ自然の魅力を表す元号である。

※背景・鐘鼎彝器銘(殷・周時代)より集字
(成田山書道美術館所蔵)

『言の葉の力』を感じる

▽取材

3H・山口駿一
3G・織田 宙
2H・木村亮介

私達は、「図書館だより」で新元号「令和」の引用元となっている萬葉集の特集を組むにあたり、貴重な史料を見せていただくため、成田高等学校から徒歩十分ほどの所にある成田山仏教図書館（公益財団法人・成田山文化財団）を訪問し、勤務している司書・飛田敏秀さんにお話を伺いました。



公益財団法人・成田山文化財団

成田山仏教図書館（パンフレットより）

明治三十四年に開設された日本で最初の公共図書館であろうとされている成田山仏教図書館は、現在三十三万冊（そのうち仏教関係は三割）の書物を所蔵しています。雑誌や漫画、新聞など、明治から昭和にかけての生活を知らることが出来る貴重なものが多く蔵書されています。その中で今回私達が見せていただいたのは、江戸時代に出版された萬葉集の版本、全二十巻です。江戸時代から現在まで保管されていた本は、時代の重さを感じ、素手で触つても大丈夫と言われましたが、震えを抑えることが出来ませんでした。恐る恐る手に取った本は、和紙で作られているからかとても軽く、一枚一枚のページは力を込めるとすぐに破けてしまいそうだと感じました。



萬葉集 宝永六版 表紙
(成田山仏教図書館所蔵)

また、史料を閲覧させてもらった後に、館内の様々な場所を案内していただき、数多くの歴史的書物などを拝見させていただきました。とても一日で見て回れるようなものではなく、計

り知れない程の叡智が詰まった場所であるのだと感じました。

今回の取材で、また一つ見聞を広くすることができました。これからも自身の知識の幅を広げる努力をすると同時に、その知識を日常生活で上手に活用することのできる人間になれるよう過ごしていきたいです。

〈成田山仏教図書館前にて〉



右から…3H・織田宙、3H・山口駿一
成田山仏教図書館司書・飛田敏秀さん
2H・木村亮介、図書部長・吉田純子

次頁より、高校三年生の図書委員（二年生一名含）が萬葉集の歌に沿わせて自分の想いを文章にしています。当然のことながら、史料には歌番号がなく、成田山仏教図書館の職員の方にご協力いただきました。ありがとうございました。

図書委員会委員長 山口駿一(3H)

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲は
ゆいづくより 来りしものそ まなかひに もと
なかりて 安眠しなきぬ・山上憶良

(巻五・八〇二)

— 瓜を食べると子供らが思い出される。
栗を食べるとそれにも増して偲ばれる。こ
んなに可愛い子供というものは、いったい、
どういう宿縁でどこから我が子として生ま
れて来たものなのであろうか。その子供のこ
とが、やたら眼前にちらついて安眠させて
くれない。—

美味しいものを一人で食べる度に、遠く離れ
た我が子を思い出し複雑な思いを抱きながら、
日々過ごしている、今も昔も変わらない親の目
線で詠まれている。私も親からの深い愛情に感
謝して、これからの人生を精一杯努力していこ
うと思う。



上段・『植物で見る万葉の世界』一一二頁・うり
下段・『植物で見る万葉の世界』一五四頁・くり

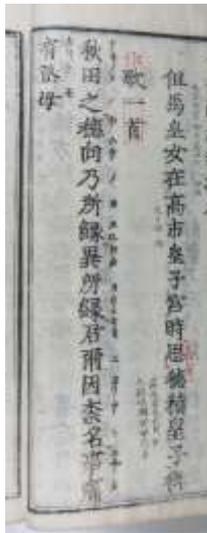
(國學院大學萬葉の花の会発行)

図書館だより班班長 織田宙(3H)

秋の田の穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄り
な言痛くありとも・但馬皇女

(巻二・一一四)

— 秋の田の稲穂が一つの方向になびいてい
る。そんな風にひたむきにあなたに寄り添
いたい。たとえ噂がひどくても。—
但馬皇女が穂積皇子を想って詠んだ一途な
恋の歌である。どんな噂があつても私はあなた
が好きという強い意思が伺える。勉強や部活、
恋愛等、様々な経験をしていく中で、この歌のよ
うに自分をしっかりと持ち後悔の無いよう全力で
過ごしていきたい。



萬葉集 宝永六版 (成田山仏教図書館所蔵)

図書館だより班副班長 木村亮介(2H)

去年咲きし 久木今咲く いたづらに 地にか落
ちむ 見る人なしに (巻十・一八六三)

— 去年、咲いた久木が今また咲いている。
むなく咲いて、地面に落ちてしまうのだ
ろうか。見に来る人もいないままに。—
巻十の『春の雑歌—花を詠む二十首』の中の
一首。去年は恋人と見たのか親しい友人と見た

のか不明だが、今年は一緒に見る人がいないら
しい。些細な日常の一コマと、繊細な感情が抜き
出されていて悲し
く儂い感じがする。

現代に生きている
僕も同じ一コマを
見ることに、自然
の輪廻の偉大さを
感じる。



『植物で見る万葉の世界』七六頁・ひさぎ

(國學院大學萬葉の花の会発行)

浅野高登(3C)

防人に行くは誰が背と 問ふ人を見るが羨し
さ 物思ひもせず (巻二〇・四四二五)

—「今度防人に行くのはどなたの旦那さん」
と気軽に尋ねる人、そんな人を見るのは羨
ましい。こんなに悲しい思いもなしに。—
「九州北辺警備(制庄)兵」として赴任する防
人の妻が詠んだ歌。自分にとつて大切な人が徴
兵される苦しみや悲しみが伝わってくる。これ
からの新しい時代が平和で穏やかであつてほしい
と思う。

小豆畑照清(3A)

士やも 空しくあるべき 万代に 語り継ぐべき
名は立てずして・山上憶良 (巻六・九七八)

— 男子たるもの、名を立てる努力はしたが
その効果なく自然に任せて終わってしまった

てよいのだろうか。後世永く語り継がれる
名声を残すことなく。――

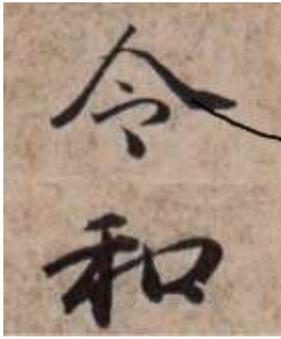
この歌は、憶良の病を見舞いに来た藤原朝臣
八束の使者に対して詠んだ歌。名門の家の出で
はない憶良は、努力を重ねたが官位に恵まれな
かった。最後まで世の中で活躍し名を残したい
という高い志を忘れない、憶良の性格や人生、
考え方が詰まっている。自分の志を持っている生
き方がとてもカッコいいと思う。

石原亮汰(3D)

山背の石田の社に 心鈍く 手向けしたれや
妹に逢ひ難き(巻十二・二八五六)

――山城の石田の社の神にいい加減に粗末な
品を手向けたからだろうか。そんな覚えは
ないけれど、あの子になかなか逢えないな
あ。――

『物に寄せて思ひを陳ぐる歌』の一つで神祇に
寄せて恋心を詠んだ歌である。時代を超えて心
の拠り所となる神頼みの必死さに笑みがこぼれ
た。



熊野切(平安時代)より集字

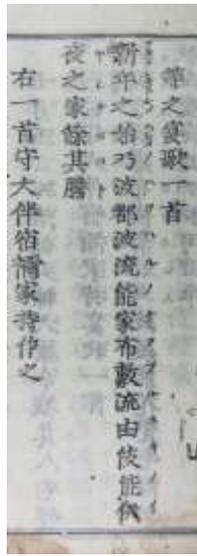
(成田山書道美術館所蔵)

一村涼太(3C)

新しき年の始の 初春の 今日降る雪の いや頻
け吉事・大伴家持(巻二〇・四五一六)

――新春の雪が降り積もる。この積もる新雪
のように、めでたいことがますますたくさ
ん積み重なればよいなあ。――

新年の祝宴を催した時のお祝いの歌。「おめで
たいこと」を「雪」に例え美しく表現している。
「平成」から「令和」になった今年、この歌のよう
に良いことがたくさんありますようにと願いた
い。



萬葉集 宝永六版 (成田山仏教図書館所蔵)

内野剛伸(3B)

あしひきの 山路越えむと する君を 心に待ち
て 安けくもなし・狭野弟上娘子

(巻一五・三七二二三)
――あしひきの(山路)を超えて越前に行こう
とするあなたのことを思うと、私の心はた
まらなく不安です。――

越前の国に流罪となる愛しい男に作者が贈
った悲しい恋歌である。あなたのことを絶対に
忘れない、一緒にいたいという強い思いが伝わ
る。いつの時代も恋愛とは、情熱と悲しさ、や

さしさが混じる複雑な想いであふれている。



牛概造像記(北魏時代四九五年)より集字

(成田山書道美術館所蔵)

尾上和矢(3F)

貧窮問答歌より抜粋

ぬえ鳥の のどよひ居るに いとのきて 短き物
を 端切ると 言へるがごとく しもと取る 里
長が声は 寝屋処まで 来立ち呼ばひぬ かくば
かり すべなきものか 世の中の道・山上憶良

(巻五・八九二二)

――トラツグミが鳴くように。ピイピイ泣いて
ばかりいると、ただでさえ短い物を更に切
り詰めるという諺のように、鞭を振る里長
の声が寝屋の戸のところまできて、わめき
立てている。こんなにも辛く苦しいことな
だろうか、世の中で生きていくということ
は。――

山上憶良が詠んだ歌にはやさしく子供を想う
歌が多いと言われるが、この歌は「世の中のどう
にもならないこと」を詠んでいる。庶民の貧しい
生活を庶民の気持ちに寄り添い、官人を批判
するような論調である。この歌のように、すべて
の人が弱者の立場に立って物事を考え、行動す

ればより良い未来に繋がると思う。

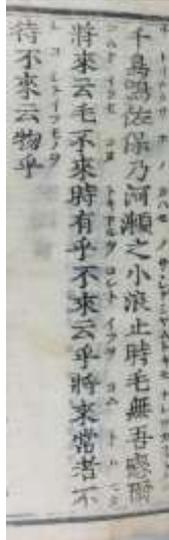
小幡大輝(3A)

来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものを

・大伴坂上郎女(巻四・五二七)

—来ようと言つても来ない時があるのに、来ないよと言つての来るだろうと思つて待つたりしない。来ないというのに。—

巻四は『個人の情を伝え合う歌』相聞』で構成されている。「来」を繰り返して、遊んでいるように歌うことで、実は、相手を待ち焦がれている心の様子がとても伝わってくる。僕もいつか誰かに恋焦がれることがあるのだろうか。



萬葉集 宝永六版 (成田山仏教図書館所蔵)

梶由峰(3E)

かなし妹を いづち行かめと 山菅の そがひに寝しく 今し悔しも (巻十四・三五七七)

—おれのかかあは、おれのかかあだから、どこにも行かめえつて、生前、山菅の反り返つた葉っぱみてえに背中合わせに寝たことが、今は悔しくてなんねえ。—

東歌として万葉集に収録されている中で唯一の『挽歌』人の死を悼む和歌である。この訳は東国風に書かれたもので、「いとしいあなた」に對する想いや後悔する気持ちが溢れている。亡くしてからでは伝えることが出来ない。伝えたい大切な思いは日々言葉にしていきたい。



萬葉集 宝永六版 (成田山仏教図書館所蔵)

加藤泥大(3D)

我のみや 夜船は漕ぐと 思へれば 沖辺の方に 楫の音すなり (巻十五・三六二四)

—私たちの船だけが不安でいっぱいなのこの夜の海を漕いでいるのかと思つてみると、おや、もつと沖の方で別の船の楫の音が聞こえる。—

この歌は、新羅(朝鮮半島にあった国)に派遣された使節団の歌。旅の不安、夜の心細さ・危険さなどの緊張が、遠くに聞こえる楫の音に解放され、ほつとして緩む人間の心情を読んでいる。確かに私も仲間たちに助けられ「自分だけではなかった。」と心細さを払拭できた事が多々ある。今後、私も仲間たちを支えられる人間になりたい。

菅谷舞(3G)

梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな 今盛りなり (巻五・八二〇)

—梅の花は今が真つ盛りだ。気心の知れた皆の髪飾りにしよう。梅の花は今が真つ盛りだ。—

この歌の序文から「令和」の元号が決まった。皆の気分を引き立てるように華やかに歌われていて新しい門出にふさわしく、私も新たな気持ちで邁進したい。



九成宮醴泉銘歐陽詢(唐時代六三二年)より集字 (成田山書道美術館所蔵)

鈴木彩優那(3B)

忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため

・大伴旅人

(巻三・三三四)



『植物で見る万葉の世界』二三八頁・わすれぐさ (國學院大學萬葉の花の会発行) —忘れ草を私の腰ひもにつけてみた。香具山のあたりのあの懐かしい古里を忘れられるように。—

大伴旅人が太宰帥に任せられて、任地で詠んだ歌。忘れ草とは、中国で忘憂草(しなかんぞう)と呼ばれた草で、身につけることで憂さを忘れられる効用があるとされた。高齢で辺地に派遣された自分の故郷への思いを忘れ草で忘れようとする昔の人の風情を感じる。状況は違いうけれど、自然災害などによって故郷を離れている人たちもまた、同じ思いをしているのだろうか。

日東寺智大(3F)

ますらをの 弓末張り起し 射つる矢を 後見む人は 語り継ぐがね(巻三・三六四)

―(ますらを)強い男のわたしが、その先端を引き絞って狙いを定め射つた矢だ。のちに「見る」とある人よ。わたしが射つた矢の勢いの強さを語り伝えてくれないか。―

生命が宿るとされる矢を神木に射たてることにより旅の安全を願う。「ますらを」は中国・周時代の官職名を表し、「役人たるもの雄々しく強く正しく名譽を重んずる人間であれ」と意識していたことがわかる。常々、自分もそうありたいと思っている。



曹全碑(後漢時代)

一八五年より集字

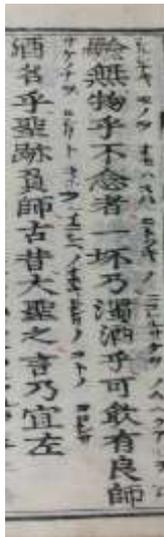
(成田山書道美術館所蔵)

星魁人(3E)

駭なき 物を思はずは 一杯の 濁れる酒を 飲むべくあるらし : 大伴旅人(巻三・三三八)

―悩んでも仕方のないことはよくよと思いつめないで、一杯の濁った酒を飲むことが良いようだ。―

大伴旅人は新元号「令和」の出典元となった「梅花の宴」を開いた歌人で、この歌は『酒を讃むる歌』の一首。当時、旅人は妻を亡くしており、悲しみを酒でやわらげたいという思いと、自暴自棄にならず愛妻の死を受け入れ立ち直ろうとする強い気持ちが伺える。辛いことや苦しいことがあっても、気持ちを切り替えて生きていく姿勢を学び、見習いたい。



萬葉集 宝永六版 (成田山仏教図書館所蔵)

益田龍之介(3E)

紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめやも : 大海人皇子(巻一・二二)

―紫草のように艶やかで美しいあなたのことを嫌だと思つたら、人妻と知りながら恋しいと思うでしょうか。いや、恋しく思つたりしません。―

大海人皇子(天武天皇)の寵愛を受け、十市皇女を生み、のちに天武の兄・天智天皇の妃となる、額田王の歌に答える大海人皇子の歌である。当時の複雑な婚姻関係にも関わらずすべてを受け入れ合う強い絆、冗談にできるほどの信頼関係はとてすこいと思う。私も将来、お互いを尊重し、許し合える友人を作りたい。

山岸梨咲(3G)

あかねさす 紫草野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る : 額田王(巻一・二〇)

―(あかねさす)美しい紫色を生み出す紫草の野、この御料地に行きあなたが袖を振るのを、番人が見ているではありませんか。―

「袖」を振る行為は相手へ求愛の行動を示すもので人に見られるのは禁忌であることから、とても大胆な感じがする。堂々と恋敵の前で恋歌を詠んだことで、宴席の場を盛り上げ、躍動感があるやり取りになっている。人生の経験を糧に、才気あふれる女性だと思った。



顔氏家廟碑 顔真卿

(唐時代・七八〇年)より集字

(成田山書道美術館所蔵)

編集後記 万葉集を訪ねて

図書部長 吉田純子

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかな
ひぬ今は漕ぎ出でな・額田の王(巻一・八)

―熟田津で船出しようとして、月の出を待っている、潮も幸い満ちてきた。

さあ、漕ぎだそうよ。―

万葉集と言われて先ず頭に浮かぶのは誰しもが額田王であろう。現代で言う人気アナウンサー兼タレントだったのかもしれない。

この歌は出兵に向かう戦意高揚のため天皇に代わって詠んだ歌と言われているが、歌だけで味わうと恋歌に思えてくる。こちらに好意があることがハッキリと判っている相手にそろそろいい返事をしてあげようかな…とでもいうような恋の駆け引き。完全優位でこちらがリード権を握っており、どうしてやろうかな?とわくわくしているようである。これが戦歌としても恐怖を消し去り、余裕で勝ちに行くのだという気分になってこよう。「令和」をひらく明るい伸びやかさが万葉集の魅力であろう。



万葉集 版本
(成田山仏教図書館所蔵)

図書委員・前期役員お疲れ様でした

図書委員及び前期役員は左記の通りです。学校図書館の円滑な運営と管理に尽力し、積極的に活動を行ってくれました。尚、9月中に役員改選を行い、後期役員が決定する予定です。

図書委員長：高3H 山口駿一

副委員長：高2G 佐久間宗士

副委員長：高2F 中田瑞樹

展示班

班長：高3E 星魁人

副班長：高2G 坪井真帆

蔵書点検班

班長：高3A 小豆畑照清

副班長：高2F 竹尾陽香

図書館だより班

班長：高3H 織田宙

副班長：高2H 木村亮介

平成三〇年(二〇一八)度年間貸出冊数

中学生利用冊数	6,451冊
高校生利用冊数	4,017冊
小学生及び職員利用冊数	381冊
合計	10,850冊

学校図書館の発行者

① [Bibliothek]

新着図書の中から、お薦めの図書を紹介

◆ 毎週発行

② 『月間利用統計』
(各教室及び図書館内掲示及び学校内掲載)

各クラスの貸出状況を報告

③ 『図書館だより』
◆ 毎月発行(各教室掲示)

テーマに沿って図書委員が取材
学校内にてバックナンバー掲載

④ 『READ』ポスター
◆ 毎年9月頃発行(全校に配布)

教職員がおススメの本の紹介ポスター掲示
及び学校内にて内容紹介

協力

成田山書道美術館
成田山仏教図書館

参考文献

・ 國學院大学万葉の花の会『植物で見る万葉の世界』万葉の花の会事務局

・ 高橋順子『恋の万葉・東歌』書肆山田

・ 半藤一利『万葉集と日本の夜明け』P.E. 研究所

・ 伊藤博(訳注)『万葉集一〜四』KADOKAWA

・ 岡野弘彦『万葉秀歌探訪』日本放送出版協会

・ 大岡信『少年少女古典文学館二五・万葉集』講談社

・ 小島憲之・木下正俊・東野治之(校訂・訳)『日本の古典をよむ四・万葉集』小学館

・ 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之『新日本古典文学大系一〜四・万葉集』岩波書店

・ 小島憲之・木下正俊・東野治之『新編日本古典文学全集六〜九・万葉集』小学館

・ 鈴木健一・編『千年の百冊』小学館